

花きの栽培管理について

ゆりの高温期における安定生産技術の実証

安定生産技術の実証

深谷市は、県内有数の花き産地で、ゆりを中心とした球根切り花が生産されています。

ゆりは、球根を氷温貯蔵し、出荷時期に合わせて定植をしているため、通年で出荷することが出来ます。

(1) 高温期におけるゆりの生育

通年で生産されるゆりですが、高温期の作型では、草丈が短くなる、花が奇形となるなどの品質低下が懸念されます。これまでの対策として、ヒートポンプを活用した夜間冷房により、ハウス内の夜温を下げる方法が試みられました。しかし、広いハウス内では、生育ステージの異なるゆりが栽培されているため、作型によっては収穫時期が遅れるといった課題があります。

(2) 遮光資材を活用した高温期の安定生産技術の実証

大里農林振興センターでは、昨年度から、高温期の安定生産技術実証として、遮光資材を活用し、ゆりの発根促進及び草丈伸長効果を確かめる試験を行っています。

(3) 昨年度の試験について

8月定植・9月出荷作型において、球根の定植直後、徒長しない程度（約10日間）に遮光資材（デュポン・タイベック700 AG）をトンネルがけしました（写真1）。

10日間の被覆期間中、地温は慣行栽培と比較して最大3・1℃下がりました。被覆を行ったほ場では根張りが良くなり、草丈及び着蕾数が慣行よりも良くなりました（写真2）。振興センターでは、高温期の高品質安定生産につながるよう、遮光資材の活用方法について今後も検討していきます。

写真1→
遮光資材の被覆



←写真2
収穫期の様子
(左) 遮光区
(右) 慣行区



花木類の病害虫について

昨年は、暖冬で梅雨が長く、花木類の病害虫管理が難しい一年でした。その中でも、注意したい病害虫についてご紹介します。

1 うめかいよう病（写真3・4）

細菌による病害です。休眠期に銅水和剤で予防し、生育期には抗生物質系薬剤で防除します。うどんこ病や灰色カビ病などの糸状菌に対する防除薬剤では防ぐことができません。細菌による病害は、風や虫の食害による傷口から侵入しやすいので、突風や降雹の後、



↑写真3
葉に水浸状の斑点
←写真4
枝に茶褐色の病斑



2 ヨコバイ類（写真5）

雨が断続的に続くような天候の時は、抗生物質系薬剤で防除します。

昨年9月に、うめ苗木畑で葉が広範囲に白化しているのが見つかりました。これは昨年、県内で初めて被害が確認された「ヨコバイ類」で、これまでは、沖縄県・和歌山県・徳島県で確認されています。カイガラムシなどの防除に使用する薬剤で防除可能です。近年の気象の変化から、これまでと同じ防除体系では防げない害虫も発生しています。

苗木畑も定期的に見回り、防除の間隔が長くなることのないよう注意しましょう。



↑写真5 ヨコバイ類(左下)と被害葉
虫体は体長3～3.5mm 黄緑色

